

煎じ薬



-
- 薬用植物の採集と保存
- 薬用植物の利用法
- 煎じ薬とその作り方
- 実際にはどのようにして煎じ薬をつくるのか
- 単味の煎じ薬
- 複合煎じ薬
- 複合煎じ薬の例
- カプセル入り煎じ薬
-
-
-
-

植物療法と呼ばれ、植物を薬として用いる療法が現在再び興味を持たれ始めている。これはとりわけ優しい医療法であり、煎じ薬のような、簡単で快い医薬品製剤を用いることが基本となっている。このような自然への回帰は好ましいものではあるが、しかし、全ての治療法と同様に最小限の知識は必要であることを忘れてはならない。勿論、重篤な病気や急性の病気の場合には、これ以外の治療法が不可欠ことが多い。しかし、煎じ薬も病人を看護したり、楽にすることに役立つ。薬用植物の上手な利用法については、掛かり付けの薬剤師に相談するのがよい。

[\[Next Page\]](#)

薬用植物の採集 と保存

フランス原産の薬用植物はかなりの数に上る。これらを一般に薬草と呼んでいる。薬草は耕されていない土地、森、あるいは道端に自然に生えている。このように自生している薬草では、アマチュアや予備知識のある薬草愛好家を満足させることはできても、絶えず増加している需要に応じるにはあまりにも少ない。このため、多くのものが栽培されており、その結果、多量に入手できるばかりでなく、より良い品質の薬草が得られるようになった。このような栽培された薬草が薬局や薬草店で売られているものである。にせ物が作られるのを防ぎ、品質を保証するために薬草は管理されている。薬草は大概は無包装のまま供されるが、小袋に包装されていることもある。

34種類の薬用植物は薬剤師や免許を持った薬草販売人以外の人でも売ることができる。この場合は、分析検査による品質の保証はない。これらの植物を販売する商人たちは必要な薬理学的知識を持っていないから、治療効果についての指示を与えることもできないし、またその義



務もない。従って、これらの薬草は各々、そのまま販売しなければならず、菩提樹、カミツレ、ハッカ、クマツヅラ、オレンジ、野薔薇の実、ハイビスカス 以外は植物同志を混合することはできない。

もし、あなたが自分で植物を採集するのなら：

- 植物の種類を確実に鑑定すること。
- できれば、乾燥した、日の照っている時に採集すること。
- 殺虫剤、ほこり、排気ガスなどに汚染されていない場所で、安全なものを採集すること。
- 葉や花は風通しの良い日陰で素早く乾燥すること。根は日に当ててもよい。
- 乾燥した植物はガラスの密閉容器に保存する。花は湿気や光を避けて保存すること。
- 貯蔵瓶には植物名と採集日が判るようにラベルを貼る。
- 植物は1～2年以上保存しない方がよい。

[\[Previous Page\]](#) [\[Next Page\]](#)

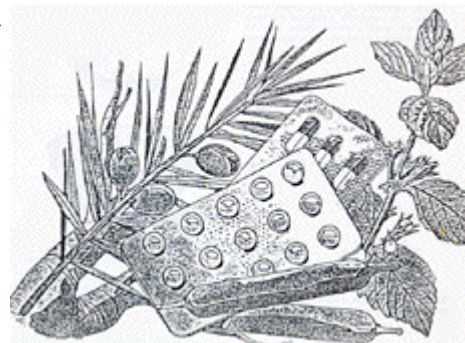
薬用植物の利用 法

特別な性質を有し、薬として用いられ、薬局方に記載されている全ての植物に薬用植物名が付けられている。各々の薬用植物は、薬効の原因となり、時には毒生の原因ともなる一つあるいは数種の有効成分を含んでいる。有効成分は、根、茎、葉、花、果実、種子、芽、樹皮などの植物体の特定の部分に含まれている。そのため、これらはしばしば別々に用いられる。

薬用植物の利用は現在では極めて多く、治療薬としてばかりでなく、食品工業や化粧品工業にも用いられている。例えば、ある種の植物は特別な効果や香りを有する故に、化粧品や衛生用品の成分として用いられる。

製薬工業では、薬用植物は多くの医薬品や特許製剤の原料となっている。フランスで作られる医薬品の40%は植物由来の有効成分を含むものである。

薬局でも、医師により処方された薬を薬剤師が調剤する際、薬用植物から作られた多くの薬剤を使っている。また薬剤師は、貴方の求めに応じて薬用植物を調合することもできる。



家庭で、私達はしばしば治療用の煎じ薬とか飲料とかを作るのに薬用植物を用いている。

これらの良く知られた煎じ薬について以下に述べよう。

[\[Previous Page\]](#) [\[Next Page\]](#)

煎じ薬とその作り

方

煎じ薬は有効成分を僅かしか含まない医薬で、病人に飲料として供される。軽く甘みを付けることもある。

煎じ薬という言葉は大麦湯を意味するギリシャ語の“ptisane” から来ている。最初にはヒポクラテスが処方した唯一の煎じ薬である大麦をベースにした飲料剤を意味していた。その後、根、樹皮、葉、花、果実、種子、それに時には動物性あるいは鉱物性の材料も入れた種々の煎じ薬が考案された。

煎じ薬を作るには、植物全体あるいは部分をきれいに洗い、付着している異物を除かなければならない。水と接する表面積を大きくするため、ナイフか鋏で(花は除いて)あらかじめ細かく切断しておくとうい。

一杯の煎じ薬を作るには極めて少量の材料で十分である。植物の必要量を計るのに“はかり”は必要としない。次のようにしておおよその量を知ることができる。

— 小さじ一杯の植物は2～5g。

— 大さじ一杯で9～12g。

これらの数値は用いる部分の密度によるので、樹皮や根は葉や花よりも数値が大きくなる。“煎じ薬わかし”や“紅茶わかし”が一般的な道具であるが、熱を保ち、きちんと蓋のできるものなら他の容器でも利用できる。

実際にはどのようにして煎じ薬を作るか？

調製法は植物の性質や使用部分によって異なる。

— **浸出剤**：植物あるいはその混合物に沸騰した湯を注ぐ。容器に蓋をして5～10分間十分に浸出させた後、浸出液を用いる。このような作り方は、一般に、茶、クマツヅラ、菩提樹、ハッカ、カミツレなど葉や花のような植物の柔らかい部分に適している。ティーバッグ入りのものも同様に浸出液として用いる。ティーバッグにはすりつぶした植物が入っている。



この場合は、作る楽しみは少ないかもしれないが、利用者にとっては簡単で速いという利点がある。



—煎剤:

あらかじめ冷水に漬けておいた植物を 10~30 分間煮沸する。この方法は茎、根、樹皮など、例えば菩提樹の白木質、フラングラ皮などのような植物の固い部分に用いる。

—浸漬剤:

使用頻度は低い。欧州産オオバコの実、ニッケイの樹皮など、根や種子に対して用いる方法で、数時間ないし数日間冷水に浸したままにしておく。



このようにして出来上がったものは、色々な使い方ができる。例えば、うがい薬、口すすぎ、湿布、浣腸、ハップ、燻蒸など。しかし、大概は飲むものであって、これが本当の煎じ薬である。

蜂蜜や砂糖で煎じ薬に甘みをつけることもできる。また不快な味がするときには、数滴のレモン果汁で香りを付けるのもよい。熱いまま、あるいは冷たくして飲むこともできる。

薬用植物の作用は緩慢で穏やかではあるが有効である。ちょっとした忍耐と辛抱強さが必要である。

単味の煎じ薬

一度に1種類の植物だけを使う煎じ薬のこと。菩提樹、ハッカ、カミツレなど、最もありふれた煎じ薬の場合がこれである。この方法で使われる植物全てのリストは長くなりすぎるので、ここではその内の最もよく使われているものについてのみ述べる。

呼吸器に効くもの：ニワタバコ、ルリヂシャ、エゾスズシロ、ユーカリ、タチアオイ、ヒソップ、キツタ、マルビウム、アオイ、ホウコグサ、マツ、キイチゴ、イブキジャコウソウ、タイム、フキタンポポ、スマレ など。

心臓や血管に効くもの：ニンニク、セイヨウサンザシ、クロスグリ、ヤドリギ、マンサク、キツタ、マヨラナ、エビラハギ、オリーブ、パセリ など。

神経系に効くもの：セイヨウサンザシ、カミツレ、ヒナゲシ、ホップ、ラベンダー、マヨラナ、メリッサ、オレンジ、トケイソウ、ボダイジュ、カノコソウ など。

肝臓や胆嚢に効くもの：キンミズヒキ、チョウセンアザミ、ボルド、ヤグルマギク、キクヂサ、シバムギ、セイヨウエンゴサク、ゲンチアナ、タンポポ、ローズマリー、タイム、ボダイジュの白木質など。

胃腸に効くもの：アニス、シキミ、ボルド、カミツレ、ヤグルマギク、コエンドロ、タラゴン、ゲンチアナ、メリッサ、ハッカ、オレンジ、タンポポ、ローズマリー、シソ、セージ、クマツヅラ など。

腎臓や膀胱にきくもの：ヒース、クマコケモモ、クロスグリ、ハマムギ、セイヨウトネリコ、セイヨウエンゴサク、エニシダ、トショウ、パセリ、タンポポ、サクランボウの果柄、シモツケソウ など。

このように、同一植物にもいくつかの用途があり、また同じ植物でも部位によって使い方が違うこともある。例えば、菩提樹の花と白木質など。詳しいことは薬剤師にたずねるとよい。

[\[Previous Page\]](#) [\[Next Page\]](#)

複合煎じ薬

10 種近い薬用植物を含むこともある混合物。この種の煎じ薬の組成は各植物の治療上の特性に依る。ある種の薬用植物は混合すると単味で用いた場合よりも強い効果を示す。これを相乗作用という。

非常に多くの複合煎じ薬の処方があり、その中のあるものは昔の薬局方に収載されている。昔の薬剤師はこの種のを盛んに調合していた。現在でも薬剤師は求めに応じて薬用植物の混合調製を行うことができる。

[\[Previous Page\]](#) [\[Next Page\]](#)

複合煎じ薬の 例

P. Delaveau, P. Benoistel, Ch. Michaut 著 “Precieuses tisane”, L. Pariente Ed., Paris 1983 より抜粋。

消化剤:クマツズラ(葉)200g, セイヨウハッカ(葉)50g, ローマカミツレ(頭状花)50g。この混合物、大さじ 1/2 に沸騰水 1/4 L を加え 15 分間浸出させる。食後に飲む。 駆風剤(腸内ガスの排出を助ける): コエンドロ(実)50g, クミン(実)50g, アニス(実)50g, ウイキョウ(実)50g。この混合物、茶さじ 1/2 に沸騰水カップ1杯を加え、15 分間浸出させる。食後に飲む。 食欲増進・強壮剤: 苦オレンジ(皮)50g, キナ(砕いた樹皮)50g,

タンポポ(砕いた根)30g,ニッケイ(砕いた樹皮)20g。この混合物、茶さじ1杯を冷水1/4 L に入れ、2時間漬ける。さらに10分間沸騰させる。アペリチフの代わりに飲む。

下痢止め剤: ハシバミ(刻んだ葉)20g, キンミズヒキ(葉のついた茎を刻んだもの)60g, コメ(実)100g, クリ(刻んだ葉)20g。この混合物、大さじ1杯に沸騰水1/2 L を加え15分間沸騰させる。症状が止むまで随時飲む。

緩下剤: タマリンド(果粥)60g, ウイキョウ(実)50g, カンゾウ(破片)50g, センナ(小葉)40g。この混合物、茶さじ2杯に沸騰水1/4 L を加え15分間沸騰させる。夜寝る前に飲む。連用しないこと。

利尿剤: サクランボウ(果柄)100g, エニシダ(花)10g, イラクサ(地上部)90g。この混合物、大さじ2杯に沸騰水1L を加え30分間浸出させる。その日のうちに飲む。

肝臓用剤: ボダイジュ(砕いた白木質)100g, ボルド(刻んだ葉)50g, ローズマリー(葉)50g。この混合物、茶さじ1杯に沸騰水カップ1杯を加え、15分間沸騰させる。食後に飲む。

足が重いときの煎剤: ガマズミ(砕いた樹皮)50g, オキナグサ(地上部を刻んだもの)50g, ニガヨモギ(刻んだ葉)100g。この混合物、茶さじ1杯に沸騰水1/4 L を加え、15分間浸出させる。食間に飲む。

鎮痛剤: セイヨウサンザシ(花穂)100g, ヒナゲシ(花)50g, カノコソウ(砕いた根)100g, バロット(葉のついた茎を刻んだもの)50g。この混合物、茶さじ1杯に沸騰水カップ1杯を加え、15分間沸騰させる。夜寝る時に飲む。

子供の寝つきを良くする煎剤: トケイソウ(葉のついた茎)25g, ボダイジュ(花と包葉)150g, 苦オレンジ(蕾)25g, マヨラナ(葉のついた茎)50g。この混合物、大さじ1杯に沸騰水1/4 L を加え、15分間浸出させる。夜寝る時に飲む。

気管支用剤: マツ(芽)100g, マルビウム(葉のついた茎)100g, ユーカリ(刻んだ葉)100g, タイム(葉)100g。この混合物、大さじ1杯に沸騰水1/2 L を加え、15分間沸騰させる。食間に飲む。

インフルエンザ用煎剤: ニワトコ(花)30g, カミツレ(頭状花)30g, ノバラ(実)30g, チャ(葉)10g。この混合物、大さじ1杯に沸騰水1L を加え15分間浸出させる。ろ過し、その日のうちに飲む。

喉のためのうがい薬:イバラ(葉)50g,プロヴァンのバラ(花)25g,タイム(花穂)25g,クルミ(葉)25g。この混合物、大さじ1杯に沸騰水1 Lを加え、15分間浸出させる。うがいに用いる。

リューマチ用剤:セイヨウトネリコ(葉)100g, クロスグリ(葉)100g, アルパゴフィタム(輪切りにした根)50g,ホウズキ(果実)50g。この混合物、大さじ1杯に冷水 1/2 L を加えて浸漬し、2時間置く。次いで 15 分間沸騰させ、その日のうちに飲む。

薬用植物から多くの恩恵を得ることができるけれども、煎じ薬は万能薬ではない。

いろいろな体の障害を軽減できるにしても、多くの病気の治療に足るものではない。それらの病気にとって他に有効な治療法がある場合はなおさらである。煎じ薬を上手に使うには薬用植物をよく知っておくことが必要である。薬用植物を混同しないためばかりでなく、それを適切に使用するためにもそのことは重要である。



[\[Previous Page\]](#) [\[Next Page\]](#)

**カプセル入り
煎じ薬**

数年前から、植物療法は新たな発展を遂げた。薬用植物は煎じ薬としてだけでなく、近代的剤型であるカプセル剤としても使われるようになった。

カプセルには植物自体を粉末にしたもの、あるいは有効成分を抽出し、濃縮して粉末にしたものが入っている。有効成分に富むので、使用に際しては医師あるいは薬剤師による適応症指示と用量設定が必要である。

翻訳者：阿刀田英子

[\[Previous Page\]](#)

- [アンフォサンテ](#)

No.70

翻訳者：阿刀田英子

-
- [Back Main Page](#)
-